I love me

詞音歌ルビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｉ　ｌｏｖｅ　ｍｅ

【Ｎコード】

Ｎ３５３９Ｒ

【作者名】

詞音歌ルビ

【あらすじ】

いろんな愛の形を探してみよ？

I love me

あなたは自分のことが好きですか？
顔が嫌だ、性格が嫌だ、癖が嫌だ……人間誰しもコンプレックスを持っているでしょう。そんなコンプレックスを受け入れ、自分のことを好きになれますか？
人は誰かを好きになると、輝きを増すと聞いたことがあります。
確かにより美しい自分を見せようと努力するでしょう。でも自分を好きにならなきゃ、自分を愛せなきゃ他人を愛することはできないのでは？

これから話す内容はフィクションです。まあ、ボクはこの世界のほんの一部しか知りませんから、ノンフィクションな話の可能性もありますが……おそらく大丈夫でしょう。

ある一人の女の子を紹介しましょう。すぐイラついて人とぶつかってしまう自分の性格が嫌いな大学一年生の女の子、森野実香。
堅苦しいのはココまで。ここから彼女の思考に切り替えます。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

「おい、森野。おまえこれで何人目だ？」
「すいません」
「はあ、一体どれだけ保護者の方を起こらせたら気が済むんだ……」
「……すいません」
「悪いんだが、森野にはこのバイトをやめてもらう。」
「えっ？そんな、ちょっと待ってください！」

「どれだけ迷惑をかけているのかわかるだろ？」
「それは……でもっ」
「失礼する。」
「……」

大学のある個室に取り残される私。
家庭教師のアルバイトをしていたんだけど、私がすぐに生徒とぶつかっちゃうもんだから親が起こっちゃって……今さっき辞めさせられたとこ。
私が悪いのはわかってる。生徒をうまくリードして効果的な勉強をさせなきゃいけないのに、私はただ怒鳴って生徒のやる気を削いでばっかり。
直したいって思ってるよ。でも、性格ってそう簡単に変えられるもんじゃないでしょ。
「はあ……バイト辞めさせられたからかな。」
何かが胸の辺りに引っ掛かってる感じがする。
こういうときはカラオケねっ。私はいつも嫌なことがあると、カラオケ行って思い切り歌って気を紛らわせるの。
大学の廊下を歩きながら携帯を開いた。誰か暇なコいないかな。

「あっ、もしもし歩美？今日暇？」
『ごめんね実香。今日はちょっと用事があって』
「そっか……うん、いいのいいの。じゃあね」

……ダメかあ。彩ちゃんはどうかな。

『只今、電話に出ることができ……』

一人で行くか。まあその方がたくさん歌えるし。

Ｉ　ｌｏｖｅ　ｍｅ（後書き）

知識の少ないボクがこんなの書くのは無理があるかもしれません。
それでも、共感してもらえるところがあったら嬉しいなと思います。
いろんな愛の形を見ていきたい……
よろしくお願いします。

一人ぼっち

「ヒトカラなんて久しぶりだなあ」

部屋番号は２３番。バイトのことなんて忘れて、軽い足取りで２階へ上った。

コップにたくさん氷を入れて、あったかいココアを注ぎ込む。カラオケ来たらココアに限るっ。

（ねえ、あれ実香じゃない？）

私の後ろから小声で話す声が聞こえてくる……

（うそ、ちょっと……どうしよう）

『どうかした、歩美、彩花？』

後ろを振り向くと、よく知っている二人ともう一人、見覚えのない男の子が立っていた。

「……歩美……彩ちゃん？」

「実香……奇遇…ね」

私が振り向くと同時に、歩美が目を背けた。

「歩美……今日用事があるんじゃなかったの？」

「……」

どうして黙って下向いてるの……何か……何か言ってよ。

「ねえっ！」
「…んど……なっ……よ」

声が小さくて聞き取れなかった。けど、なんとなく……なんとなく歩美が震えているのが分かる。
その後すぐ歩美は顔を持ちあげて、貫かんばかりの鋭い目で私の目を見てきた。

「面倒になったのよ！あなたと付き合っていることが」
「……えっ……どういうこと？」
「言葉の通りよ」
「……そんな、歩美っ」
「実香は自己中なのよ。私たちが意見しても、最後は強引にでもあなたの考えに付き合わされて……もう嫌なの、こんなの」
「……彩ちゃんも……歩美と同じ考えなの？」

今にも溢れ出しそうな涙を堪えて彩ちゃんに聞いてみた。答えを聞くのはとっても怖かったけど、聞かなかったら今後辛くなるだろうし、後悔すると思ったから。
彩ちゃんは俯いたまま何も言わなかった。

「やっぱり、そうなのね……もしかしてさっきの私の電話、気付いてた？」

彩ちゃんがコクッと小さく首を縦に振った。

「そう……」

気付いていて出なかった。無視されたんだ、私。
その応答を見て、いよいよ耐えられなくなった私は勢いよく階段

を駆け降りた。人前で涙を見せたくないっていう私のプライドを守るため。そして何より、あの場にいたら今にも爆発しそうな怒りのようなこの気持ちを落ち着かせるために。

『実香、ごめんね』

階上からかすかに聞こえてくる彩ちゃんの声も今の私には届かない。

友達だと思っていた二人の、私に対する本当の気持ち。高校の頃くらいからクラスで浮いてて、みんなとも仲良くできなかった私。こんな私を友達として見てくれる人がいるって、大学に入って、二人に会って思った。すっごく嬉しかった。なのに……結局は今まで と何も変わらない。

また一人ぼっちだ……

階段を下り、投げ出すようにお金を置いてカラオケから出て行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3539r/

I love me

2011年10月8日16時56分発行